

# コロナ禍におけるLMS・ICTを活用した高等学校「現代文B」の授業実践 ——森鷗外『舞姫』を例に——

瀧山 嵐

はじめに

二〇二〇年、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の世界的な流行と、その禍害により人々の生活様式は一変した。その影響は、教育現場においても例外ではなく、各教育機関は対応に追われ、通常の対面型授業の実施は困難となった。二〇二〇年四月七日、日本政府は、東京・神奈川・埼玉・千葉・大阪・兵庫・福岡の七都府県に緊急事態宣言を発出した。同一六日には、宣言の対象が全国に拡大された。こうした状況下において、早稲田大学本庄高等学院の学生は、原則、自宅からオンライン授業を受けることになった。早稲田大学の付属校である本学院では、二〇二〇年より導入された授業支援システム Learning Management System (LMS) の「Waseda Moodle」(以下、ムードル)を活用することで、オンライン授業を実施してきた。ムードルは、生徒への連絡事項の伝達や授業動画の配信、課題やレポートの提出機能、授業に使用する参考資料をアップロードするための機能などが備わっている。

コロナ禍におけるLMS・ICTを活用した高等学校「現代文B」の授業実践

九月になると随時、教室での対面型授業が再開されるようになった。しかし、教室の座席には、飛沫防止のためのパーテーションパネルが立てられ、アクティブ・ラーニングのようなグループワークを取り入れた対話型授業の積極的な実施は困難だった。さらに、学校図書館や地域の図書館の利用を前提とした課題なども、感染症予防の観点と、生徒の間で図書館の利用に差が生じることを考慮すると断念せざるをえなかった。

そこで、極力、図書館の利用や生徒同士の接触を回避するために、ムードルや情報通信技術 Information and Communication Technology (以下、ICT) 機器を活用する授業を構想した。当初より重視していたのは、本授業を平常授業の代替措置と位置付けるのではなく、ムードルやICT機器を活用することでしか経験できない授業を実現することだった。今後も平常の対面型授業の実施に困難が生じた場合、教育現場におけるLMSやICT機器の活用的重要性は一層、高まっていくだろう。本稿は、二〇二〇年九月から十二月までのコロナ禍に実施した高等学校「現代文B」、森鷗外『舞姫』の授業実践報

告である。

## 一 授業の目的と構成

### A 授業担当クラスの実態

早稲田大学本庄高等学院の三年生を対象にした「現代文B」における森鷗外『舞姫』の授業である。担当クラスの受講生は、四二人（文系三〇人、理系一二人）クラスと、四一人（文系三一人、理系一〇人）クラスの計八三人である。

生徒へのアンケートによると、「これまでに『舞姫』を読んだことがありますか（原文・現代語訳を問わない）」の質問に対し、「ある」と答えた生徒は、三人と少数だった。他方、『舞姫』以外の作品を読んだことのある人は、一五人（一人の生徒の複数読んだことがある場合も含む人数）いた。その作品の内訳は、『高瀬舟』一三人、『山椒大夫』二人、『文づかひ』一人、『杯』一人、『最後の一句』一人、『ヰタ・セクスアリス』一人だった。『高瀬舟』を読んだことのある生徒の多くは、別の授業で読む機会があったようだ。

高大連携校である本学院は、断片的な知識の集積に留まることのない、総合的な理解力や判断力の育成に力を入れているため、様々な授業スタイルに順応できる生徒が多い印象である。ただし、国語全般に苦手意識を持つ生徒も一定数いるため、理解度を確認しながら授業することを心掛けた。

## B 授業の目的

『高等学校学習指導要領（平成三〇年告示）解説 国語編』の「第2節 国語科改訂の趣旨及び要点」は、二〇一六年（平成二八年）二月の中央教育審議会答申における高等学校の国語科の課題を引用している。

高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている<sup>①</sup>。

上記の課題のうち、本授業では、特に以下の三点を意識している。

- ①教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があること。
- ②文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること。
- ③多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること。

①については、講義型の授業を一部取り入れつつ、生徒が取り組んできた課題を基に、他の生徒の着眼点や発想を学ぶことで、自身の理解を深める。②については、課題プリントの「内容整理」「語釈」「鑑賞」に取り組む。③については、教科書という媒体から一度離れて、

自筆原稿・草稿を読む。特に、自筆草稿にみられる削除記号や推敲の痕跡に注目し、刊行された『舞姫』の本文との比較・検討を行い、流動的な本文の変遷の意義について考える。

指導資料掲載の「単元のねらい」には、「この単元では、擬古文を用いた近代小説を読み味わうことにより、小説の多様な表現形式に触れるとともに、作品の背景にある時代と文化の状況について理解を深めることをねらいとする」とある。本授業の目標も大方は、これと軌を一にするものであるが、重要なことは、そうした擬古文の読解や表現の理解を、生徒自身が取り組むことのできる授業作りである。

## C 授業の構成

授業で実践する主な活動を以下に列記する。尚、以下の丸数字は授業時間数ではなく、便宜的に活動内容を区分した数字である。

- ① 導入―書物の形態についての理解を深める。
- ② 導入―『舞姫』の自筆草稿を読む。他の近代文学作品の草稿と比較する。
- ③ 講義―『舞姫』・森鷗外に関する基礎事項を確認する。
- ④ 講義―擬古文の文体や表現について学ぶ（1～13段落）。課題の準備をする。
- ⑤ 課題―課題に取り組む。（一巡目）
- ⑥ 発表―担当範囲の「内容整理」「語釈」「鑑賞」について発表をする。（二巡目）

コロナ禍におけるLMS・ICTを活用した高等学校「現代文B」の授業実践

- ⑦ 課題―課題に取り組む。（二巡目）
- ⑧ 発表―担当範囲の「内容整理」「語釈」「鑑賞」について発表をする。（二巡目）
- ⑨ 課題―課題に取り組む。（三巡目）
- ⑩ 発表―担当範囲の「内容整理」「語釈」「鑑賞」について発表をする。（三巡目）
- ⑪ 講義―授業のまとめ。
- ⑫ 振り返り

上記のうち、①②の導入（第二節）、⑤⑩の課題と発表（第三節）、⑫の生徒の振り返り（第四節）を中心的に取り上げて、以降報告する。

## 二 導入―『舞姫』自筆草稿の読解

国語の教科書には様々な文学作品が収録されており、教科書の本文の多くは、主要な注釈書を底本として利用し、字体や表記の校訂をはじめ、ルビやフォントに至るまで編集されている。こうした教科書の校訂された本文は、学習者や授業者の利用を想定して編集されているはずであるが、穿った見方をするならば、ある種の均質的かつ没個性的な印象が生じることも否めない。無論、教科書の編集のあり方への批判ではないが、こうした教科書の均質性・没個性性を相対化する視点も重要だろう。完全に教科書に依拠するのではなく、他教材と教科書とを有効的に組み合わせることで、生徒にとっても一面的な視点に留まることなく、多面的な視点から文学作品と向き合う経験となり得

る。

そうした問題意識に基づき、本授業の導入は、現代文の授業では一見、無関係に思われる書誌学の観点を基にしている。一般に書誌学とは、「書物を研究の対象とする学。書物の概念規定、書物の材料・形態・装訂などとその変遷、書写・印刷の様式・方法の変遷、テキストの成立・伝来・校訂などから、文庫・蔵書家に及び、印刷・出版・書肆などの業にわたる」と認識されている<sup>3)</sup>。授業冒頭から教科書の本文読解に徹するのではなく、文学作品にリアリティや親しみを抱くきっかけとして、こうした書誌学を取り入れた授業は効果的であると考え

る。最初に、教室内に備えてある書画カメラを利用して、架蔵の和本や複製本をプロジェクターに投影しながら、卷子本・折本・粘葉装・列帖装（綴葉装）・袋綴をはじめとする書物の主要な形態と、その特徴について説明を行い、加えて短冊や古筆切、百人一首のかるた（江戸時代の画家、尾形光琳の複製版）を紹介した。そして、近代文学の執筆に使用された原稿用紙や、新聞や雑誌のメディアと出版の問題にも言及しつつ、各時代の文学作品が、何に、どのように書かれ、人々に読み継がれてきたのかについて問題提起をした。

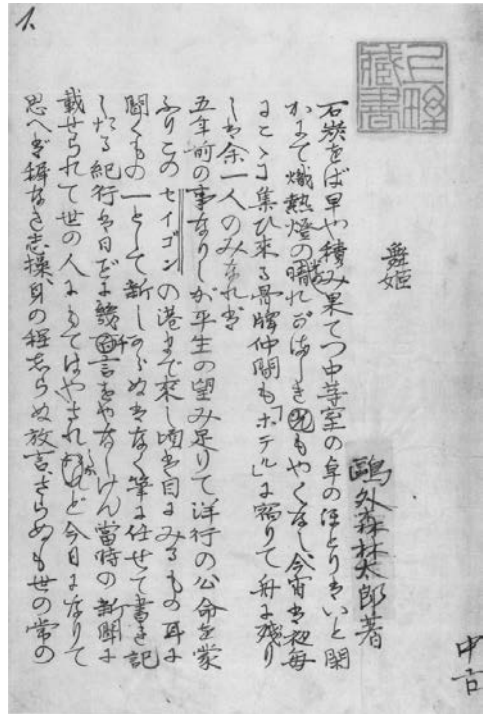
稿者の専門領域である平安時代の文学作品の多くは、「作者」が実際に書写した原本 *original* が残存する例は殆ど皆無である。さらに言えば、「作者」自体が不明、あるいは不確かである場合も少なくない。一方、近代文学作品の多くは、幸いにも作者自筆の原稿や草稿に恵まれており、複製本や影印本、あるいは、デジタル画像でも確認できる

場合もある。

森鷗外『舞姫』の自筆草稿は、上野精一が、古書店弘文荘の店主である反町茂雄から購入し、その後、京都の便利堂からコロタイプ版の複製本を作成・刊行した<sup>4)</sup>。この自筆草稿は、二〇一五年三月に実施された「国際稀覯本フェア」に出品され、学校法人跡見学園が購入し、現在に至る<sup>5)</sup>。

複数の近代文学作品の自筆原稿・草稿を比較するために活用した図版に、日本近代文学館（編）『複製近代文学手稿100選』（二玄社、一九九四年）がある。当該本は、主要な近代文学作家八一人の計一〇〇作品の自筆原稿・草稿を原寸カラーで掲載し、『舞姫』草稿の冒頭一葉も収録している<sup>6)</sup>。原本に忠実な原寸のカラー図版ということもあり、スキャンした図版を教室のプロジェクターに投影しながらの説明が可能となった。さらに複数の著名な近代文学作品の自筆原稿・草稿を確認できるため、生徒の関心も高まっていたように思う。生徒の活動としては、当該本の中から夏目漱石『こころ』、および森鷗外『舞姫』を取り上げ、教科書の本文と比較して、本文の表記や異同、推敲の痕跡、筆跡や用紙の特徴など、相違点と共通点とを自由に論述する課題を実施した。

紙幅の都合もあるため、『舞姫』の自筆草稿についてのみ報告する。『舞姫』の自筆草稿は、罫線の無い半紙が使用され、一丁あたりの行数と一行当たりの文字数とが統一され、端正な筆致で墨書されており、全体として整然とした印象がある。



図版 学校法人跡見学園蔵『舞姫』自筆草稿

嘉部嘉隆は、この行数と文字数について、

一丁の表裏ともに、それぞれ十二行ずつ記され、一行が二四字から成っている。読点およびカギ括弧は字数には含まれていない。一行二四字は、『國民之友』と同じである。まるで下に野線を引いた下敷きを置いて書いたように左右が揃っている。一行の字数が『國民之友』と同じであるということは、『國民之友』に発表を予定して執筆したということになるであろう<sup>7)</sup>。

と指摘する。たしかに、自筆原稿を一見すると、整然とした印象は抱くものの、文字数や行数に至るまで統一されていることについては、稿者自身もこの指摘に触れるまでは気付くことができなかった。

また、宗像和重は、「下敷きの枠目に合わせながら、自分の考えを

コロナ禍におけるLMS・ICTを活用した高等学校「現代文B」の授業実践

まとめていくのは難しいに違いない<sup>8)</sup>という推測から、当該草稿が清書稿であると位置付けた。さらに続けて、「当初は若干の字句訂正にとどまっているが、やがて原稿はそこから逸脱し、数行にわたる削除や、欄外に大きくはみ出すほどの修正が加えられるようになる」とし、原稿用紙という「制約を脱して自己主張しようとする言葉と、それを押し止めようとする見えない枠目との緊張や葛藤をこそ、この原稿から読むべきではなからうか」と指摘する<sup>9)</sup>。原稿用紙の形式と作者の執筆における息づかいとを読み取ろうとする営みは、教科書の本文だけでは経験することのできないことであり、こうした視点からも他教材を発見し、有効的に活用する価値が認められる。

生徒が取り組んできた課題を確認してみると、筆跡の特徴、句読点やルビの有無、変体仮名をはじめとする表記の問題に関する指摘が多くあった。また、自筆草稿と教科書の本文との異同の指摘もあった。

しかし、行数や文字数に関する問題を指摘する生徒はいなかった。そこで、前述の嘉部の見解を紹介してみると、「たしかに言われてみれば、その通りだ」という反応が多々みられた。第一次資料に準ずる実物を詳細に観察し、様々な気付きや疑問を見出すことは、学問の根幹にある基礎的な営みである。

このように、自筆草稿を自らの眼で観察することで、スタンダードである教科書を相対化できるだけでなく、相違点と共通点とを見出し、その理由や意義を考える複眼的な視点が得られるだろう。

この導入を切り口に、明治二二年一二月執筆の『舞姫』草稿、翌年一月、雑誌『國民之友』への発表、同年一〇月の『国民小説』（民友社）

への再録、そして複数の改訂の問題<sup>(10)</sup>へと接続していき、『舞姫』や森鷗外の基礎事項の説明に繋げた。

授業内で取り上げた、推敲に関する二例の考察を紹介する。尚、教科書の本文は、『塵泥』（大正四年二月二三日）を底本とする『鷗外全集 第一巻』（岩波書店、一九七一年）に拠っているため、実質的には自筆草稿と、幾度かの改訂を経た『塵泥』本文との比較となる。以下の【A】は教科書の本文であり、特に推敲した痕跡がみられる箇所を太字傍線で示した。【B】は、その推敲箇所に対応する自筆原稿の本文である。自筆原稿には、削除記号があり、行間に書き入れがある。削除記号は、便宜的に四角の囲いで示した。

最初の例は、官命を受けた豊太郎がドイツへの留学に意を決する場面である。

#### 【A1】教科書 第4形式段落

故郷なる母を都に呼び迎へ、楽しき年を送ること三年ばかり、官長の覚え殊なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我が名を成さんも、我が家を興さんも、今ぞと思ふ心の勇みたちて、五十を越えし母に別るをもさまで悲しとは思はず、はるばると家を離れてベルリンの都に來ぬ。

#### 【B1】自筆草稿

五  
…四十を踰えて漸く老いんとする母…

ちて四十を踰えて漸く老いんとする母に別るをもさ

「四」「て漸く老いんとする」の箇所に削除記号を付し、「五」「し」と行間に書き入れている。嘉部嘉隆は、この箇所の改訂について以下のように指摘する。

「五十を踰えし母」には、一旦留学したならば再会の可能性は少なくなる。同じ別れでも、別れるに際しての悲しさの度合は大きく異なると言える。「五十を踰えし母に別る、をさまで悲しとは思はず」とは、強い悲しみを打ち消すほどにも留学に対する期待が大きかったということになる<sup>(11)</sup>。

指摘の通り、作中での豊太郎の母の死は重要な出来事となり、年齢表記の改訂は、豊太郎の留学への決意の大きさを際立たせるための設定と見なすことができよう。普通であれば読み飛ばしてしまいそうな年齢表記を一つ取り上げてみても、このように作品内容との深い関連が見出せるのである。

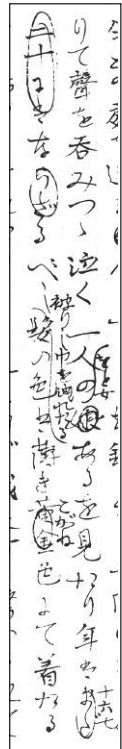
次の例は、ある日の夕暮れ時、豊太郎が「クロステル巷の古寺の前」で涙を流すエリスを見かける場面である。

#### 【A2】教科書 第15形式段落

今このところを過ぎんとするとき、鎖したる寺門の扉に寄りて、声のみつつ泣く一人の少女あるを見たり。年は十六、七なるべし。

#### 【B2】自筆草稿

…聲を呑みつゝ泣く一人の娘あるを見たり年はまだ  
二十にはならざるべし…  
とと女  
十六七



「娘」「まだ二十には」の箇所には削除記号を付し、「をと女」「十六七」と行間に書き入れている。また、「らざ」に削除記号を付す。元々は、「二人の娘あるを見たり年はまだ二十にはならざるべし」の本文だったが、「二人のをと女あるを見たり年は十六七なるべし」と改訂した。当該箇所の『国民之友』本文は、「ひとりの少女あるを見たり年は十六七なるべし」とあり、「をと女」が「少女」となっている。教科書の本文の「少女」には、ルビが付されていない。草稿の読み方をふまえるならば、「少女」を「おとめ」と読むべきであろう。嘉部嘉隆は、この箇所の改訂について以下のように指摘する。

主観的な観点からすれば、「二十にはならざるべし」なら、十八九歳という感じになり、十六七歳とでは可憐さが異なる。やはり、より幼い方が太田豊太郎にとって憐れさを強く感じることになるだろう。<sup>(12)</sup>

さらに、氏は、第28形式段落「十五のとき舞の師の募りに応じて、この恥づかしき業を教へられ」と、第23形式段落「彼が抱へとなりしより、はや二年なれば」との二箇所から、この時のエリスが一七歳であると判断し、エリスの年齢を「十六七なるべし」としている方が、「構成上無難でもあるわけ」、主観的な可憐さの問題とも相俟って書きあらためた<sup>(13)</sup>と重ねて改訂の理由を考察する。

## A 課題

### 三 課題・発表——ICT機器の活用とジグソー法の応用

本節では、第一節の「C 授業の構成」の⑤～⑩に相当する活動について報告する。課題の内容は、「内容整理」・「語釈」・「鑑賞」の三項目である。「内容整理」の目的は、担当範囲のストーリーの大枠を自ら整理するために担当範囲を熟読し、まとめる内容を取捨選択することで、文章理解を深めていくことにある。「内容整理」のまとめ方の例として、矢印や記号を使用した板書形式のまとめ方や本文を引用しつつ要約形式のまとめ方を提示したが、限定することはなかった。

次に「語釈」の目的は、文章を読み進めていくうちに、当然、擬古文特有の言い回しや難解な語彙などが出てくるため、そうした言葉をまとめることにある。言葉は、単独で意味を生じるのではなく、文脈の中で意味をもつ。取り上げた言葉が、文章中でどのような意味を有する言葉であるかを考えることで、より文章への理解が深まると考える。

最後に「鑑賞」の目的は、上記二つをふまえて、担当範囲の中で問題を設定し、それに対する考えや結論を導くことにある。生徒の多くは、擬古文に不慣れではあるが、表現の問題や関心のあるテーマ、あるいは注釈書の内容に対する自身の見解などについて考えてもらった。立脚する観点が異なれば、一つの解釈や着眼点に収斂することのない読解ができるだろう。立ち位置が変われば、自ずと見えてくる景色も変わるのである。さらに、題名を付すことも必須にした（参考

資料】。題名を付すことは、自身の「鑑賞」内容の要点を的確に言語化することにもつながり、大学進学後のレポートや卒業論文の作成にも活かされる。

課題プリントは、A3用紙上段に「内容整理」、下段に「語釈」「鑑賞」の欄を設けて、一枚に収まる形式で作成した。このような形式にしたのは、既定の枠内に取捨選択した情報や要点をまとめていく練習になると判断したからである。さらに本課題は、教室内での発表を前提とした課題であるため、課題プリントをプロジェクターに投影した際に、他の生徒にも視覚的に分かりやすい資料を作成する目的もある。当然、調査や考察を深めてきた生徒にとっては、書き足りないことも予想されたが、そうした箇所に関しては、発表の際に口頭で説明を加えるなどの工夫ができる。

さて、本稿冒頭でも述べた通り、本授業は図書館の利用や授業時間内でのグループワークによる生徒同士の接触を極力避けることを前提としている。図書館の資料を利用する代替措置として、モデルの担当授業のページに、注釈書や年譜の参考資料をアップロードし、受講生徒全員が参照できるように設定をした（著作権の問題もあるため、閲覧ページにはパスワードを設定し、課題の参考資料として使用することと、モデル内での閲覧に限ることを事前に告知をしている）。

また、モデルは、PCやスマートフォン、タブレットのマルチデバイスに対応しているため、必要があれば授業中にも参照することが可能である。他教科の課題の負担も鑑みて、多数の『舞姫』の注釈書の中から比較的情報が詳細な資料に絞って選択した<sup>14</sup>。生徒は、モデル

ル上の参考資料と副教材に指定した井上靖（訳）『現代語訳 舞姫』（筑摩書房「ちくま文庫」、二〇〇六年）が手元にある状態で課題に取り組むことになる<sup>15</sup>。

さて具体的な課題の内容について確認する。1～13段落までは、課題のやり方や、注釈書の活用方法、問題設定の例、擬古文を読解するうえでの語彙や文法上の注意点などを中心に講義した（第一節「C 授業の構成」③④の講義）。説明の際、「石炭をばはや積み果てつ」（第1形式段落）、「人知らぬ恨み」（第3形式段落）、「奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表に現れて、昨日までの我ならぬ我を攻むるに似たり」（第9形式段落）など、『舞姫』の作品全体に関わる重要な所については、問題提起に留めて講義をした。この問題提起は、生徒の課題・発表を見ていく中で関連した内容や授業のまとめの講義（第一節「C 授業の構成」⑪の講義）の際に説明をした。

教科書の72の形式段落を便宜上、九つに区分した。

#### 【第一巡目】

- 1…14～25段落 エリスとの出会い
- 2…26～29段落 エリスの交際・免官と母の死
- 3…30～35段落 ドイツでの新しい生活

#### 【第二巡目】

- 4…36～40段落 エリスの妊娠と相沢の便り
- 5…41～45段落 再会と相沢の忠告
- 6…46～53段落 ロシア行き



### 【第三巡目】

7…54…60段落 エリスとの再会

8…61…67段落 天方伯大臣の誘い

9…68…72段落 エリスの発狂・帰国

出席番号順にそれぞれ、1・4・7、2・5・8、3・6・9のグループ担当を割り当てた。一週間に三コマの授業があるため、単純計算として三週間程度（祝日や行事での休講日を除く）で完結する内容である。

### B 発表

課題プリントは、発表日前に一度提出してもらい、稿者がそれらの確認とスキャンを行い、授業当日に返却する。その課題の中から幾つか選択し、生徒に配布した。同じ担当範囲であれば、他の生徒の考え方を学ぶ機会になり、担当範囲外であっても、内容理解を深めるための資料にもなる。

平常通りの活動が困難な状況にある中で、伝達型の講義形式の授業に偏向することなく、いかに生徒の主体的学習を保証する授業が構想できるのが課題となる。そこで本授業は、エキスパート活動・ジグソー活動・クロストーク活動から成るジグソー法から着想を得た活動を取り入れた。

ジグソー法とは、三宅なほみを中心とする東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構が構想する「知識構成型ジグソー法」(The knowledge-Constructive Jigsaw Method)と呼ばれる授業モデルの<sup>(1)</sup>

コロナ禍におけるLMS・ICTを活用した高等学校「現代文B」の授業実践

とである。ジグソー法を活用した授業では、最初に授業で答えを出したい問いを立てる。その問いに答えを出すために必要となる複数の「部品」を、グループに分かれて担当し、内容を理解する(エキスパート活動)。その後、それぞれ「部品」の担当者が一人ずつ集まり、各内容を統合して問いに対する答えを出す(ジグソー活動)。出た答えを公表し、相互的に検討し合い、一人ひとり納得のゆく解答を構成していく(クロストーク活動)。

課題は、グループでの活動ではなく、個人の活動となる。生徒が取り組んできた課題は、授業時間の発表でプロジェクトに投影するため、他の生徒に共有されることになる。任意に指名した生徒の課題をプロジェクトに投影し、それをもとに発表を行う。発表中の生徒たちは適宜、メモを取り、内容の確認をする。発表後は、質疑応答の時間を設定し、特に「鑑賞」についての議論がなされた。

生徒一人ひとりが『舞姫』全編を熟読することは理想であるが、時間の制約や負担を鑑みても、現実的ではない。しかし、この方法であれば、内容は副教材の現代語訳等で大方のあらすじを把握し、担当範囲外の箇所については、他の生徒の課題の資料や授業時の発表を通して、理解を深めていくことができる。発表することを前提にしていたこともあり、生徒たちの課題には、見易さや着眼点を強調した工夫が多くみられた。

こうした状況下であっても、講義型の授業に偏ることなく、他の生徒の知見や着眼点に接することで、自身の理解を相対化し、深めていくことができる。

#### 四 授業の評価と今後の課題

さて、授業の最終回では、これまでの活動内容を振り返る課題を実施した。課題は、授業担当クラスの八三人のうち八一人の集計結果に基づく。まず、授業全体の評価は、以下の通りである。

・積極的に『舞姫』の課題に取り組むことができた。

1 取り組めた…五四人

2 どちらともいえない…二五人

3 あまり取り組めなかった…二人

・授業を通して『舞姫』への理解が深まった。

1 とても深まった…六五人

2 どちらともいえない…一四人

3 あまり深まらなかった…二人

全体的には、意欲的に課題に取り組む生徒が多く、回数を重ねるごとに内容のまとめ方や、「鑑賞」の着眼点の独自性が洗練されていく傾向があった。一方、一回あたりの担当範囲を縮小し分割したものの、他教科の課題の時期とも重複することもあり、負担になったとの意見もあった。特に、年間行事や祝日に伴う休日により、授業回数が減ったクラスでは、授業終盤に駆け足になる場面もあった。こうした他教科との課題のバランスと、授業計画の不備については、稿者の力量不足であり、今後、改善していきたい。

次に、課題への取り組みに関する評価である。振り返りプリントの「実際に、内容整理・語釈・鑑賞に取り組んでみて、どのような気づきや発見等があったか」の質問への回答を紹介する。

・内容整理をすることで、段落ごとに内容を追うことができるので分かりやすかった。語釈をすることで分からない言葉を飛ばすことなく読むことができ、内容を理解することにつながった。また、年齢や季節など細かいことに拘っていることがわかった。鑑賞は違った視点から本文を理解することができるのでより内容を知ることができた。

・『舞姫』は以前現代語訳を読んだことがあったが、物語の内容を追うだけで満足してしまっていた。今回の授業で内容整理・語釈・鑑賞に取り組むことで、作者の表現の工夫や情景描写、物語の構成に着目することができた。それによって、この作品は豊太郎の手記という形をとっており、豊太郎の出来事の語り方やその中の矛盾に豊太郎の心情があらわれていることに気付いた。

・ひとつひとつの表現に意味があつて、人物の感情などを効果的に表すために考え抜かれたものだという時間を時間した。今までは国語の授業で教わったことだけが唯一の正解だと思っていたけど、鑑賞に取り組む自分で考えることで正解がひとつではないことを知った。人それぞれの考え方や読み方があっていいんだと思えた。

・内容（範囲）によって、それぞれふさわしい内容整理の仕方があるということ。自分は内容を理解したうえで書いているが、読む人は内容をほとんど理解していない人なので、何も知らない人にもわかりやすく伝える方法を考え、「内容整理」を場面に応じて行った。語釈もただ意味や定義を書くだけでは、そのコトバがどのような経緯で使われ、どのような意味で用いられたのかまでは伝わらないということがわかった。注釈書を参考にするので、まず自分の理解を深めることができ、その上で自分のコトバでかみくだいて説明することで、他範囲を担当している人にも伝わりやすくなるのではないかと感じた。鑑賞はその範囲を読むだけではわからず、文章全体を通して読んでみてはじめてわかるが多かった。

・自分が今まで読み取れていなかった著者の工夫（比喩や情景描写など）が実際に見つけられなかったことが今後も自分が読書をしていくうえでの財産になったように思う、以前は比喩については読者の想像の助けになるからそのように書いているのだろうと漠然と思うだけだった。「なぜその比喩を選んだのだろう？」というところまで解釈をしようとしていなかった。

・自分なりにではあるけれど、森鷗外の考えや工夫について理解を深められた。情景描写による心情の表現や、比較などを使った表現することによる豊太郎の変化など、単に読んだだけでは分からないような面白さを知った。

・自分で内容整理をした部分は完全に頭に入っていることを実感

コロナ禍におけるLMS・ICTを活用した高等学校「現代文B」の授業実践

した。鑑賞をすると、後から通して読んだときに違った見え方がしてくるのがおもしろかった。語句の意味は理解する上で重要だけど、1度調べただけでは別の文章で出てきた時に忘れてしまっているものもあると思う。

・自分で内容を整理するためには、繰り返し読むしかないので内容理解が深まったこと。

・最初にさらっと読んだときに比べて、物語のより深いところまで読み解くことができた。今後の展開や、登場人物らの心情を暗示する表現を見つけるたびに読むのが楽しくなった。

・内容整理だけではなく鑑賞をすることで、ただ内容を把握するだけではなく、もう一歩踏み込んで作品への理解を深めることができた。白紙に1つの枠しかないスペースの中に、どうやってまとめるか工夫をこらすことでビジュアル的にも自分が理解しやすいようにまとめることに挑戦できたし、どうまとめるか考える最中にも脳の中を整理できていた気がする。

・今までの現代文の授業では先生が板書した語の意味や文の解釈を覚えることしかやってきかなかった。今回はじめて文学作品を自分で鑑賞文を書いてみて、一単語だけでこれほど深掘できると感じた。

・鑑賞はすごく小規模な論文のような感覚でやりました。難しかったです。語釈は、辞書で調べれば出て来る意味を調べるのとは違って、鷗外の背景や作品内での独自の意味のようなものを持っている単語・フレーズ・文などをMoodleの参考資料で

調べるのが面白かったです。今までそこまで深く調べたことがありませんでした。でも時間がかかりました。

・今まで鑑賞というものをして、感想文レベルだったけど、この課題に取り組んでみて物語を深読みしたり書かれていないことを考えたりするやり方や面白さが分かった。

・一度読んだだけでは気づかない、細かい表現や対比に、気づくことができました。季節や時間に気を付けて読むことが、登場人物の心情の変化なども読みとることができるということがわかりました。内容整理をすることで、自分の考えや知識も整理できました。

全体的に多くみられた意見は、作品の内容を自分でまとめる時に、繰り返し文章を読む必要があり、要点を絞っていくため、頭に残りやすかったというものである。生徒の多くは、現代語訳を参考にしながら教科書の本文に即して、「内容整理」の課題に取り組んでいた。

一方で、現代語訳や辞書を参考にしても、擬古文特有の文体や助詞・助動詞の意味など、自力で調べきれなかったという生徒の意見もあった。

本授業では、極力、原文における独自の言い回しや表現方法を読解することに重点を置き、現代語訳を参考資料として位置付けていたが、生徒によつては現代語訳を熟読し、原文を参照していいと思われることもあった。生徒にとって、第一次的な本文が現代語訳となり、教科書の本文が第二次的になることは、予測していた現象である。

しかし、いずれにしても、授業内の発表や解説の中では、現代語訳と原文とを相互補完的に読み解くことを強調していく必要がある。稿者は、現代語訳を副次的な教材と位置付けているのではなく、むしろ作品享受のあり方として重視している。時間が許すならば、複数の現代語訳の本文を比較する活動を取り入れ、『舞姫』がどのように書かれているのかという視点から、どのように読まれているのかという視点へと接続していく授業を考えてみても良いかもしれない。

#### むすびにかえて

ここまで、コロナ禍における高等学校「現代文B」の授業実践について報告してきた。本来であれば、生徒自身がグループワークの中で他の生徒と議論することで、自身の理解を深めていくことが望ましいのだろう。しかし、本授業で実施した課題は、一人ひとりの生徒が、限られた情報の中から自分なりに要点を絞り、内容をまとめていくことと、自ら問題を設定し、それに対する見解を出すことが求められた。

この課題の一部は、クラスで共有するため、生徒の課題プリントが、授業内容そのものとなり、板書の役割やノートの役割、定期試験前の教材の役割も果たす。生徒の課題内容を見てみると、実に様々な視点から「内容整理」や「鑑賞」の課題に取り組んでいる。その課題内容を最大限に活かすためには、授業者の周到な教材研究（研究論文や注釈書から多くの着想を得ること）と、発表および質疑応答の内容を展開させていく授業運営とが肝要であると痛感した。

グループワークの場合、一部の生徒に発言が偏ったり、議論するこ

と自体が目的となってしまう傾向もあるが、本課題は生徒全員が取り組むため、そうした偏りはなかった。さらに、授業日よりも前に稿者が、課題内容を把握し、内容ごとに分類して授業時に取り上げることができたので、前半の講義（第1～13形式段落）で解説した文体や表現の問題、および作品全体に関わる問題提起などを適宜取り上げながら、最終のまとめの講義に至ることができた。

近時、新学習指導要領と大学入学共通テストへの移行とにより、国語教育のあり方を問い直す動きが活発となっている。稿者が実際に参加した主な企画としては、「これからの「国語科」の話をしよう!」――紅野謙介『国語教育の危機』（ちくま新書）を手がかりに――（二〇一九年一月一三日、於大妻女子大学）、「古典は本当に必要なのか」（二〇一九年一月一四日、於明星大学）、「古典文化と言語」分科会主催「国語教育の将来―新学習指導要領を問う」（二〇一九年八月一日、於日本学術会議）、「高校に古典は本当に必要なのか」（二〇二〇年六月六日、オンライン開催）などがある。これらのシンポジウム・ワークショップには、大学教員、中学校・高等学校の教員、学生（大学院生・大学生・高校生）、出版社など、数多くの参加者がいた。当時の稿者は、学生の立場から聴講していたが、基調発表や質疑応答を通して、いかに教育現場の教師や生徒が困惑しているのか窺い知ることができた。さらに、二〇一九年（令和元）八月一〇日付で、日本文学関連学会連絡協議会所属の一六団体の連名による「高等学校国語・新学習指導要領」への批判的な見解が提示された。以下に全文を掲出する。

コロナ禍におけるLMS・ICTを活用した高等学校「現代文B」の授業実践

平成30年に告示された新学習指導要領において、国語科必修科目は「現代の国語」と「言語文化」に、選択科目は「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」の4科目に分かれているが、これらの科目を「論理的な文章」「実用的な文章」を扱うか、「文学的な文章」を扱うかによって区分する基準に対し、われわれは深い憂慮を覚えるものである。「論理」「実用」と「文学」とを対立概念として捉えることは元来不可能である。また、個々の教材を「文学的」であるか否かによって区分することもまた不可能である。日本語の歴史とともに歩んできた「文学」は、人間の存在意義や尊厳と関わる人文科学、社会科学全般と密接に関わっている。「文学」を狭義の言語芸術に限定し、囲い込んでしまうことによって、言葉によって新たな世界観を切り開いていく「人文知」が、今後の中・高等教育において軽視され、衰退しかねない危惧がある。上記の観点から、新学習指導要領の実施にあたっては、単位の認定、教科書検定等に際し、「人文知」の軽視されることのない、柔軟な運用を行うことを強く求めるものである。<sup>17</sup>

傍線部にあるように、本来は切り離すことのできない概念を、境界線が不明確な基準により分類することで、「人文知」全体の危惧へと繋がっている。現在、こうして教育現場に関わることになり、時代の要請のもとで、国語教育に留まらず、「人文知」全体のあり方を根本から問い直す転換期を迎えているのだと痛感する。

アクティブ・ラーニングをはじめ、ICT機器やLMSなどの時代的な言葉に振り回されるのではなく、こうした状況だからこそ、それ

ぞれの特質を見極めたうえで有効的に活用していく必要がある。

〔付記〕

教科書は、『新 探求現代文B』（桐原書店、二〇一九年）を使用した。所収の『舞姫』の本文は、『塵泥』（大正四年二月二三日）を底本とする『鷗外全集 第一巻』（岩波書店、一九七一年）に拠る。

ご所蔵の『舞姫』自筆草稿の図版掲載のご許可をくださった学校法人跡見学園に厚く御礼申し上げます。

〔注〕

- (1) 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』（東洋館出版社、二〇一九年）
- (2) 亀井秀雄（他著）『新 探求現代文B【指導資料】第四分冊 II 部②』（桐原書店、二〇一八年）
- (3) 井上宗雄（他編）『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、一九九九年）
- (4) 上野精一『森鷗外自筆 舞姫草稿』（便利堂、一九六〇年）
- (5) 山崎一類「論考「森鷗外自筆／舞姫草稿」（学校法人跡見学園所蔵）の意義」（文京区立森鷗外記念館NEWS）一五、二〇一六年六月）。尚、当該草稿の図版は、嘉部嘉隆（編）『森鷗外「舞姫」諸本研究と校本』（桜楓社、一九八八年）や、安川里香子『現代語訳 森鷗外「舞姫」』（審美社、二〇〇一年）にも、全丁掲載されている。
- (6) 保昌正夫（監修）・青木正美（収集・解説）『近代作家自筆原稿集』（東京堂出版、二〇〇一年）にも、原寸大のカラー図版で計五〇人の近代文学作品の自筆原稿が掲載されている。同書には、森鷗外「おもひ草の序」が掲載されている。本授業では取り上げることができ

なかったが、原作者の異なる作品の自筆原稿を比較する活動も今後導入していきたい。

- (7) 嘉部嘉隆「本文改稿過程の検討 鷗外自筆草稿」（嘉部嘉隆（編）『森鷗外「舞姫」諸本研究と校本』桜楓社、一九八八年。礎稿は、「森鷗外「舞姫」草稿における推敲の意味」『樟蔭国文学』第二三号、一九八六年一月）
- (8) 宗像和重「制度としての原稿用紙―その予備的考察―」（『投書家時代の森鷗外』岩波書店、二〇〇四年。初出、『文学』第九巻、一九九八年一月）
- (9) 注8に同じ。他に同氏の「原稿用紙という断片―その来歴をめぐって―」（国文学研究資料館（編）『集と断片』勉誠出版、二〇一四年）や、「栞目の近代―「原稿用紙」をめぐる―」（日本近代文学館（編）『近代文学草稿・原稿研究事典』八木書店、二〇一五年）が、近代文学作品における原稿の問題を取り上げている。後者の事典所収の安藤宏「筆記用具の痕跡（万年筆・インク・筆・鉛筆・筆跡など）」は、筆記用具に着目し、『舞姫』自筆草稿について、「最終的には読んで鑑賞に堪える浄書を残さねばならぬ、という意識」を読み取る。
- (10) 『舞姫』は幾度かの改訂を経ている。
  - ・草稿（明治二年二月）
  - ・『国民之友』（明治三年一月、民友社）
  - ・『国民小説』（明治三年一〇月、民友社）
  - ・『美奈和集（水沫集）』（明治二年七月、春陽堂）
  - ・『改訂水沫集』（明治三年五月、春陽堂）
  - ・『塵泥』（大正四年二月、千草館）
  - ・『縮刷水沫集』（大正五年八月、春陽堂）大きな改訂箇所としては、『美奈和集』以降、それまで掲載されていた第四形式段落の本文が削除されている。杉本完治『森鷗外『舞姫』本文と索引』（新典社、二〇一五年）は、『塵泥』と『国民

之友』の本文を見開き頁で対照させながら読むことができる。同書の頭注には、語義とともに草稿段階の表記も掲出されているため、簡便である。

(11) 注7に同じ。

(12) 注7に同じ。檀原みずす「森鷗外「舞姫」異本考―縮刷版「美奈和集」の位置づけのために―」(『樟蔭国文学』、第一八号、一九八〇年十二月)は、草稿から『国民之友』への用語の変更について、「日常語」や「感じを柔らげたり或は分り易くしたもの」として位置付けている。

(13) 注7に同じ。

(14) アップロードした参考資料は、以下の通りである。注釈書は、三好行雄(校注)『近代文学注釈大系 森鷗外』有精堂出版、一九六六年)、小泉浩一郎(他校注)『新日本古典文学大系 明治編25 森鷗外集』(岩波書店、二〇〇四年)の二冊である。後者は、自筆草稿以降の六つの諸本の本文異同を脚注で確認できる。他にも、ロバートキャンベル・戸松泉・宗像和重「舞姫」注釈(『文学』第八卷、一九九七年七月)や『鷗外近代小説集 第一巻』(岩波書店、二〇一三年)等も資料としてアップロードする予定だったが、参照する情報が過多になると判断したため、前記の二冊に絞った。さらに、森鷗外の年譜資料として、山崎國紀『評伝 森鷗外』(大修館書店、二〇〇七年)、小堀桂一郎『ミネルヴァ日本評伝選 森鷗外―日本はまだ普請中だ―』(ミネルヴァ書房、二〇一三年)をアップロードした。

(15) 原文との忠実さでは、井上靖訳が利用しやすいと考えて副教材として扱った。現代語訳は他にも、注5の安川の現代語訳や『現代語訳で読む舞姫』(現代語訳で読む名作シリーズ①、理論社、二〇一二年)などもあるが、本授業では、武田友宏(著)・角川書店(編)『ビギナーズ・クラシックス 近代文学編 鷗外の「舞姫」』(角川学芸出版、二〇〇六年)が廉価であることと、原文と現代語と解説

とが充実しているため紹介した。

(16)

三宅なほみ・齊藤萌木・飯窪真也・坂本篤史(編著)『自治体との連携による協調学習の授業づくりプロジェクト 平成22年度報告書「協調が生む学びの多様性」』(東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構、二〇一一年)、三宅なほみ・齊藤萌木・飯窪真也・利根川太郎「学習者中心型授業へのアプローチ―知識構成型ジグソー法を軸に―」(『東京大学大学院教育学研究科紀要』第五一号、二〇一二年三月)、白水始・飯窪真也・齊藤萌木・三宅なほみ(編)『協調学習 授業デザイン ハンドブック 第2版―知識構成型ジグソー法を用いた授業づくり―』(東京大学 CORE、二〇一七年三月)

(17)

古代文学会・西行学会・上代文学会・昭和文学会・全国大学国語国文学会・中古文学会・中世文学会・日本歌謡学会・日本近世文学会・日本近代文学会・日本社会文学会・日本文学協会・萬葉学会・美夫君志会・和歌文学会・和漢比較文学会の各ホームページや学会誌に掲載されている。

【参考資料】「鑑賞」題名一覧

<p>14 25段落</p>	<p>語り手（豊太郎）の一人称の局地的な変化 お互いに惹かれ合う瞬間 色による表現 互いの第一印象の感じ方の違い エリスの印象の変化 豊太郎はなぜエリスを助けた？ 実はあざとい？エリスの涙 豊太郎↓エリスの心情 豊太郎は面白い？ 「私」とエリスの対比 エリスの涙―豊太郎によってもたらされた心境の変化― 豊太郎の変化 豊太郎のエリスに対する印象 豊太郎とエリスの人物像 自我の芽生えによる女性意識 豊太郎とエリスの関係 エリスの母の態度の変化 「我ながら我が大胆なるにあきれたり」 エリスの計画性 エリスは何故寺門の扉で泣いていたのか 豊太郎とエリスの間に愛はあるのか エリスの「目」の変化 両者のひとめぼれ 豊太郎の視線 エリスの家の位置関係 場違いな高価な花 「美しき粧」と「価高き花束」 地理的な正確性</p>
<p>26 29段落</p>	<p>豊太郎のエリスに対する心境の変化 エリスとの出会いによる豊太郎の変化 他とは違ったエリスと彼女の環境との因果関係 豊太郎の恋愛観の覚醒 エリスとの関係の変化 豊太郎・エリス間の恋愛感情の成熟 豊太郎が現実逃避するほどのエリスの魅力 エリスと豊太郎の関係の変化 豊太郎が抱く感情の「矛盾」 エリスの行動の変化 豊太郎とエリスの関係の変化 豊太郎のエリスへの気持ちの変化過程 豊太郎の変化が生んだエリスとの関係の変化 エリスとの関係（仲）の変化 エリスは期待はずれ？ツンデレ豊太郎 豊太郎の母に対する思いの変化 豊太郎の読了本から考える内面の変化 免官前後の二人の関係の変化 エリスの豊太郎への思いの変化 豊太郎とエリスの関係性の変化 二十九段落に見る太田の自我の目覚め 二箇所詠嘆「ああ」が示す豊太郎の後悔 同胞の仲間とエリスとの関係を誤解されたワケ 豊太郎とエリスの愛 女の死に対する豊太郎の感情とその死の意味 「恥づかしき業」である舞姫 母の書状の内容考察 母の死が豊太郎に与えた影響</p>
<p>30 35段落</p>	<p>学問か愛か なぜ「退きたり」は「荒みぬ」に変更されたのか？ 出世への執着 比喩表現から見る豊太郎の変化 豊太郎の新しい生活に対する満足度 エリスの影響で変化した豊太郎 主体性の無い豊太郎 豊太郎の本心 メンタルブレイカー・豊太郎 我が学問荒みすぎ案件 豊太郎の文学の変化 「我が学問」に対する二種の見解 豊太郎の汚名返上 二つの荒井んだ学問 豊太郎の「学問」をめぐる表現の比較 学問変化と豊太郎の人物像 我が学問は荒みぬ 留学が豊太郎に与えた影響 豊太郎の学問と心情の関係 客観的に見た豊太郎 生活の充実と学問の衰退 「我が学問は荒みぬ」の二つの意 豊太郎の中の「学問」の変化 豊太郎の成長 二つ「我が学問は荒みぬ」の捉え方 豊太郎の学問への姿勢の変化 免官で失ったものと得たもの</p>



<p>36～40 段落</p>	<p>二十一年の冬 エリスの心情の変化 豊太郎の葛藤① 「北ヨーロッパの寒さ」から見る二人の心情 エリスの妊娠に対する豊太郎の気持ち エリスの妊娠に対する豊太郎の反応 豊太郎とエリスの生活の変化 冬で積もった雪に対する対比表現 豊太郎が「不興なる面もち」をしていたのはなぜか 相沢からの手紙 雀の描写とエリス 40段落の豊太郎のセリフについて考えられること 地の文の描写による暗示 エリスと豊太郎の心情 エリスの言葉に対する豊太郎の心情の考察 職か妻か 明治二十一年の冬 豊太郎は妊娠を望んでいない！ 豊太郎が相沢の手紙を受け取った際の心情 子供ができた！今の気持ちは 妊娠に対する二人の反応 「冬」が与えるネガティブな印象 豊太郎の軽率な行動？ 季節が冬である理由 推敲箇所の推敲理由考察（予想） 生と死の対比 豊太郎の不安 寒さの表現について</p>
<p>41～45 段落</p>	<p>エリスは間に合わせ？ 豊太郎の返答の正当性と一種の寒さ 豊太郎と相沢の人物像の比較 豊太郎の性格 なぜ最後心の中に寒さを感じたのか ドイツ留学・エリスとの交際によって変化した豊太郎 45段落における表現の考察 比喩表現が示す豊太郎の葛藤 豊太郎の相沢への想い―彼の忠告を受けて― 「寒さ」とは 風景・状況描写の意味 余が覚えた「心の中の一種の寒さ」 深刻さの程度表現 45段落の情景描写と豊太郎の心の寒さ 45段落の存在 45段落の情景描写の考察 豊太郎が決断に至るまで 温度から分かる豊太郎の気持ち 豊太郎の心の中の情景 情景表現と心情のリンク 相沢の示した「前途の方針」とは 心象風景の変化 相沢の人物像 境界から見た豊太郎の心情の揺らぎ 相沢との再会における豊太郎の心境 豊太郎と相沢の対比 豊太郎は悲劇のヒーロー？</p>
<p>46～53 段落</p>	<p>豊太郎の性格 エリスと豊太郎の対比 豊太郎の本質 エリスの手紙からみる愛情の相違 エリスの手紙から読みとるエリスの心情 戦略家相沢謙吉 決断への第一歩 「我が恥」 やらかし豊太郎 豊太郎の迷いの現れ エリスの手紙 豊太郎のロシア行き認識 豊太郎とエリスのすれ違い 豊太郎からエリスへの気持ちの割合の変化 「偽りなき我が心を厚く信じたれば」の解釈 豊太郎の「恥」 エリスの豊太郎に対する気持ちの強さ 豊太郎の厄介な性格 豊太郎の自己肯定感 繰り返す後悔？ 豊太郎の人間性 豊太郎の言い訳 豊太郎の生きがいの変化 豊太郎とエリスの間の見えない溝 「否」から始まるエリスの手紙の分析 エリートコース復帰とエリスの板ばさみ</p>

<p>54～60段落</p>	<p>豊太郎は何を思っ て驚いたのか 天気の描写の意義 豊太郎が愛情に傾く 「自我の目覚め」は本物だったのか？ 帰宅するまでの情景描写 豊太郎を帰すな！エリス必死のアピール 結局出世なのか恋愛なのか？ 払拭された豊太郎のまよい 垣間見えるエリスの不安 豊太郎とエリスのすれ違い 寒さと登場人物の気持ち 豊太郎とエリスの心情 比喩表現が示す豊太郎の決意 豊太郎の心情の変化 豊太郎の心情の揺れ 豊太郎の葛藤② 文体から考える豊太郎の本心 エリスの重さに対する豊太郎の反応の変化 エリスの再会時の豊太郎の心情 「稜角ある水片」に込める意図 56段落が持つ意味 エリスの愛情と圧力 豊太郎の心の揺れとそれを描く森鷗外 鳥が表す状況関係 エリスの言動から読み取れること エリスの強い結婚願望が表れている箇所 馭丁の一言 豊太郎にとってのエリス・相沢</p>
<p>61～67段落</p>	<p>決断と責任 豊太郎の目に映る「光」 「エリスの部屋の光」が表す内容を考える 対比表現がなされている箇所の考察 豊太郎の決断によって… 豊太郎の「弱さ心」 物語終盤における「死」の表現 時間の描写が示す豊太郎の悩みと矛盾 街のにぎわいを描写する効果／豊太郎の罪意識 国民意識 エリスと豊太郎のこれから 情景描写と二人の心情 罪悪感のアピール 「承知した後」豊太郎はエリスをどう思っていたのか 時刻 「まことの我」の中に潜む「我ならぬ」 豊太郎の家路と雪 期待と期待の板挟みになる豊太郎 豊太郎の後悔と風景 豊太郎の心情と雪の描写 豊太郎の内心と周囲の対比 豊太郎が天方伯の誘いを承諾した訳 獣苑（ティヤーガルテン）を舞台とした場面転換 物事を承諾する上での豊太郎の心情の変化 豊太郎の「特操なき心」 豊太郎が心境を表す描写 豊太郎の周囲の環境の変化 豊太郎の感じている温度</p>
<p>68～72段落</p>	<p>豊太郎とエリスの病状対比 豊太郎によるエリスの描写に関する矛盾 「恨み」から「恨む心」へ 文中の余と私の使い分け エリスの崩壊 豊太郎という人物の性格の意図 72段落の意味 豊太郎は計算高い エリスと実際にエリスのモデル 豊太郎が日本に帰った理由 相沢を「憎む心」から分かること 豊太郎の「クズ男さ」を文章から分析 豊太郎にとってのエリスの存在意義 本当に相沢は憎まれる対象だったのか 豊太郎の「相沢を憎むころ」 なぜ豊太郎は数週間意識不明だったのか 豊太郎の涙 豊太郎の「恨み」とは何か エリスの発狂 弱き心が生んだ悲劇 自己正当化を続けた豊太郎 相沢謙吉のモデルは誰なのか 最高にして最低の親友？ 豊太郎のエリスと相沢への想い 豊太郎の恨み 豊太郎が相沢謙吉を恨む理由 豊太郎の恨み</p>

【課題プリント】(担当番号5・7から二枚ずつ掲出する)

現代文Bの学習

読解

表現

現代文Bの学習の目的は、読解と表現の二つに大別される。読解は、作者の意図や作品の背景を理解することであり、表現は、自分の考えや感情を言葉で表現することである。現代文Bの学習では、読解と表現の両方をバランスよく学ぶことが大切である。

【課題プリント】(担当番号5・7から二枚ずつ掲出する)

現代文Bの学習

読解

表現

現代文Bの学習の目的は、読解と表現の二つに大別される。読解は、作者の意図や作品の背景を理解することであり、表現は、自分の考えや感情を言葉で表現することである。現代文Bの学習では、読解と表現の両方をバランスよく学ぶことが大切である。

【課題プリント】(担当番号5・7から二枚ずつ掲出する)

現代文Bの学習

読解

表現

現代文Bの学習の目的は、読解と表現の二つに大別される。読解は、作者の意図や作品の背景を理解することであり、表現は、自分の考えや感情を言葉で表現することである。現代文Bの学習では、読解と表現の両方をバランスよく学ぶことが大切である。

【課題プリント】(担当番号5・7から二枚ずつ掲出する)

現代文Bの学習

読解

表現

現代文Bの学習の目的は、読解と表現の二つに大別される。読解は、作者の意図や作品の背景を理解することであり、表現は、自分の考えや感情を言葉で表現することである。現代文Bの学習では、読解と表現の両方をバランスよく学ぶことが大切である。

【課題プリント】(担当番号5・7から二枚ずつ掲出する)

現代文Bの学習

読解

表現

現代文Bの学習の目的は、読解と表現の二つに大別される。読解は、作者の意図や作品の背景を理解することであり、表現は、自分の考えや感情を言葉で表現することである。現代文Bの学習では、読解と表現の両方をバランスよく学ぶことが大切である。

【課題プリント】(担当番号5・7から二枚ずつ掲出する)

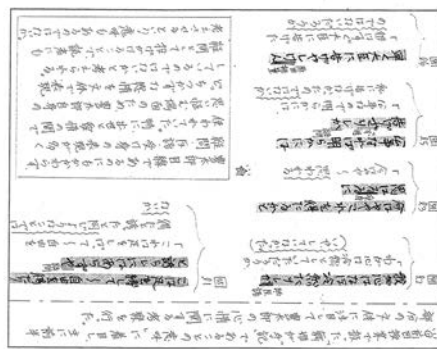
現代文Bの学習

読解

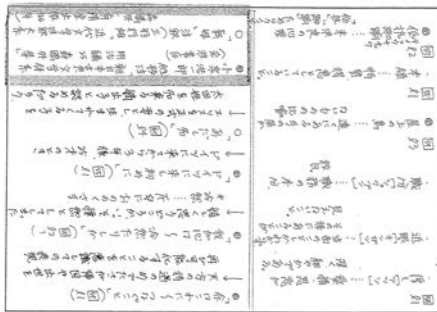
表現

現代文Bの学習の目的は、読解と表現の二つに大別される。読解は、作者の意図や作品の背景を理解することであり、表現は、自分の考えや感情を言葉で表現することである。現代文Bの学習では、読解と表現の両方をバランスよく学ぶことが大切である。

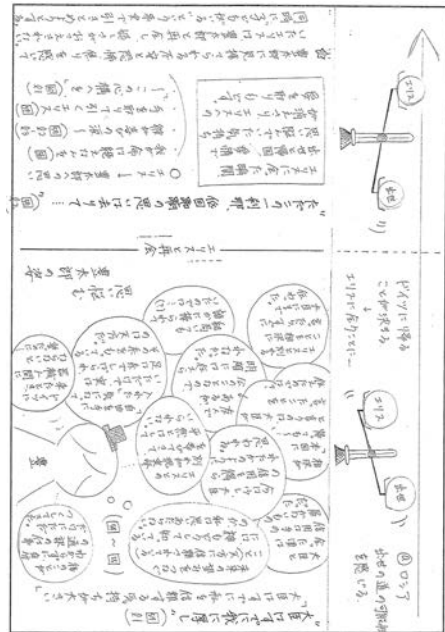
【課題プリント】(担当番号5・7から二枚ずつ掲出する)



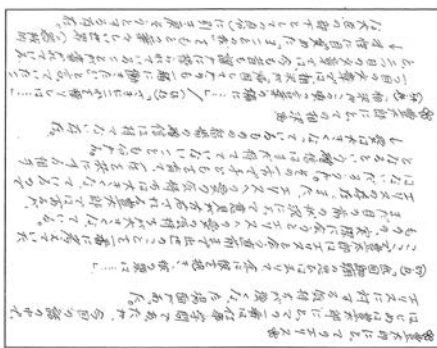
【現代文B】 大作家の創作と時代



【現代文B】 大作家の創作と時代



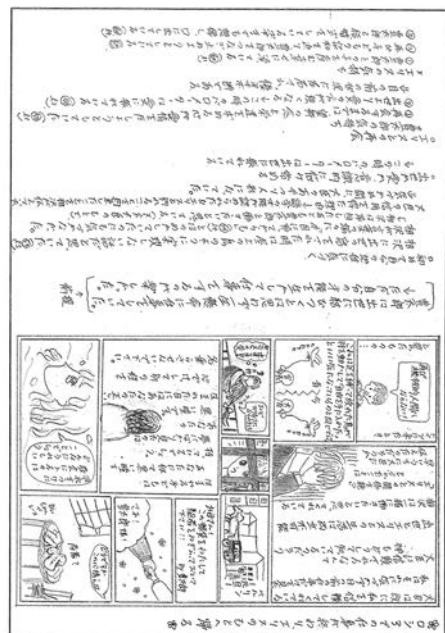
【現代文B】 大作家の創作と時代



【現代文B】 大作家の創作と時代



【現代文B】 大作家の創作と時代



【現代文B】 大作家の創作と時代